

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 25 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380666

研究課題名(和文) 中国内モンゴル自治区における牧畜民の定住化に伴う地域社会の再編に関する実証研究

研究課題名(英文) Research on reorganization of the local community with settling down of the livestock farmers in Inner Mongolia Autonomous Region of China.

研究代表者

何 淑珍 (HE, Shuzhen)

宮城教育大学・教員キャリア研究機構・協力研究員

研究者番号：60624848

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の対象地は中国内モンゴル自治区のジョウ黄旗であり、事例研究という手法を用いて、定住化による牧畜地域社会の変容と今後の展望を明らかにすることを目的としている。

1980年代初頭から今日に至るまでいくつかの現代化政策および環境保護政策を経て、牧畜民の生活と生産は都市的生活様式が浸透するとともに、従来通りの放牧から酪農とチーズ生産へとといった生産様式の変化が見られる。現代化が進む一方で、牧草地不足と生活と経済面両方における不安定が明らかになった。生産様式だけでなく生活のあり方もまた多様化せざるをえず、地域の共同生活が困難となっていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This paper analyzes the change of life-style the livestock farmers and the transformation of the community of Inner Mongolia Autonomous Region in the crisis that meadows are short, by carrying out an interview to four livestock farmers that lived in Hubeetshara-Hosho.

The investigation clarified that, in Hot which is the local smallest unit, the joint ownership of the well and the joint use of meadows disappeared, and the individual treatment use settled. And an individualization advances to the relations of the mutual aid other than the ceremonial occasion. Furthermore, the lack of meadows, the remarkable rise of the breeding expense suppress management, and the secession from Hot brings instability of the life. The life-style of the city penetrates, and life became convenient, but the issue of inheritor is occurring. This paper showed the prospects to explore the joint use of meadows on having done it assuming individualizing it.

研究分野：社会学

キーワード：地域社会学 牧畜地域 社会調査

## 1. 研究開始当初の背景

(1)モンゴル高原の南部に位置する草原地帯である内モンゴルでは、遊牧が二千年来続いて行われてきた。この地では、モンゴル民族が「五畜」(羊、馬、ヤギ、牛、ラクダ)を飼育してきた伝統がある。移動しながら放牧する生産・生活様式には、家畜の飼育、牧草地の保護など多様な面において、独特のメカニズムが働いている。たとえば、葉草の多い牧草地に放牧することによって疫病を予防し、塩分の多い場所に放牧することによってウイルス性の家畜病を予防し、放牧地をローテーションすることによって牧草地を保護するなど、牧畜の知恵が秘められている。牧畜民はゲルに住み、五畜を飼育し、草と水を追い求めて家畜とともに移動する。食事は「赤い食」(肉)と「白い食」(乳製品)といわれる伝統食である。

(2)牧畜民が生活しているのは最小の地域単位であるホトとそれを構成しているアイルである。本研究では牧畜民の生活変化についてホトとアイルとを中心に考察するので、ここでそれらについて説明しておきたい。中国の省に該当する内モンゴル自治区の行政区分は、日本の県にあたる自治区の下に、盟・市・ホショー(旗)・鎮・ソム・ガチャ・ホトである。ホトとはモンゴル語でもともとは「城」あるいは「都会」という意味である。しかし、現在ではホトとは牧畜社会のもっとも基礎となる生活集団を指す。1つのホトは4戸から8戸のアイルで構成されている。アイルは牧畜民の家族(世帯)の呼称である。遊牧による移動の際、水のある場所と牧草に恵まれた場所を選んでいた。生活用水と家畜用水を確保するために、1つのホトには必ず1つの井戸があり、ホトの全アイルがその井戸から生活用水と家畜用水を共有する。

(3)牧畜民の伝統的な生産・生活様式が、1980年代初頭に入ってから劇的な変化を遂げることになる。その背景には、中国政府が全国で行った「家族請負責任制」の実施がある。牧畜地域において実施された政策の中身は、牧草地の利用と家畜の所有の両側面に関わるものであった。牧草地の利用については、それまでホトの上の行政区分であるガチャ単位で牧草地を共同利用していたのを、ホト単位で共同利用するようになった。そこで、ホトとホトとの境界線が明確になった。ホト内の各アイルの間では、牧草地の利用は共同で行われた。家畜の所有については、それまで、ガチャ単位で集団所有していた家畜を、アイルを単位として個人に配分した。この政策によって遊牧から定住放牧へと移行することになった。1990年代後半になると、放牧形態がさらに細分化され、定住放牧が完全に定着した。その背景には、「草地分割利用制度」の実施がある。本政策の実施によって、土地の使用権・管理権が30年契約で個人に

配分された。牧草地の利用がホト単位での共同利用から、各アイルを単位とした個別の利用となり、各アイルの牧草地の間では明確な境界線が引かれた。各アイルは有刺鉄線で各自の牧草地を囲い込み、各自の区切られた牧草地で放牧するようになった。さらに、2000年代初頭に定住放牧から畜舎飼育と酪農経営へと移行した。この原因は2003年に実施された「三牧政策」である。この政策の実施によって、牧畜地域全体が二つに分かれた。すなわち、放牧が季節的に禁止された地域と、放牧が完全に禁止された地域である。前者の季節的に禁止された地域にいる牧畜民は、4月1日から5月15日までという期間中に限って家畜を畜舎で飼育し、それ以外の季節には定住放牧を続けるという形態になった。後者の完全に禁止された地域にいる牧畜民は、さらに二つの方向へ生産・生活の転換が迫られた。一つは、現在の居住地での定住放牧生活をやめ、新しく建設された「移民村」に移転し、そこで酪農経営に従事することである。もう一つは、第二次、第三次産業に移ることである。この「三牧政策」の実施によって、この地で続けていた放牧という形態が季節限定になり、さらにはこの地で生きて来た牧畜民が経験したことのない酪農経営という新しい飼育形態が現れた。

## 2. 研究の目的

本研究は、中国内モンゴル自治区における牧畜民の生産・生活の変容を明らかにする。中国の国家政策を背景に、1980年代から今日まで内モンゴル自治区の放牧形態は大きな変化を見せている。放牧の方法や牧草地の分割、さらには酪農経営への転換などで、かつての牧畜民の生産・生活が危機的な状況を迎えつつあると見てよいと思われる。また、放牧形態の変化と畜舎飼育の導入、さらに酪農によって、牧畜生産だけではなく、牧畜民の生活においても以前にはなかった諸問題が生じている。そこで本研究では、内モンゴル自治区で実施した事例調査によって、こうした状況を明らかにする。牧畜民の生活変化を、アイルの構成変化や個別牧畜民の生活史を直接に聴取することによって、より具体的に明らかにしようとする。

## 3. 研究の方法

(1)本研究の対象地は、中国内モンゴル自治区のシリングル盟に属しているフベートシャラ・ホショーである。生産形態に基づいて牧畜地域、農耕地域、半牧半農の農牧混合地域という3つの地域類型に分けられる内モンゴル自治区の中で、本ホショーは純牧畜地域である。

(2)本研究の調査方法は、いわば「有為抽出による半構造化インタビュー」といえるが、日本の農村社会学が培ってきた調査手法に多くを学んでいる。日本農村社会学の調査研

究では、いわゆる「モノグラフ」調査として、対象事例を多面的、重層的に調査するなかから、対象が持つ個性的な側面を理解し、諸事例を比較することに焦点を合わせてきた。この調査手法は、特定の調査事例を選定して、その事例についてインテンシブな実態調査を行うことによって、研究課題に応えようとする。また、調査自体は各種資料の収集分析も行うが、中心となるのはインフォーマントに対するインタビューである。本研究では「聞きがたり」という手法をとって、対象者の生活と行動を聞き取り、その生活行動を規律している要因をつかみとろうとしている。

(3)インタビューの対象者は4名で、全員モンゴル族であり、インタビューはモンゴル語で実施した。インタビューは複数年に数次にわたって実施している。

#### 4. 研究成果

(1)本研究の対象地は、1980年代初頭の「家族請負責任制」をはじめとする中国特有の現代化政策と、都市的生活の浸透および機械化の進展といった生活と生産における近代化を経て、牧畜民の生活のもっとも基礎集団であるホトおよび牧畜民の生活それ自体に個別化が進んだ。井戸の共有と牧草地の共同利用を基盤とした遊牧生活から、井戸と牧草地の個別利用が定着した。ホトにおける相互扶助関係も、冠婚葬祭以外は個別化が進んだ。

(2)「三牧政策」の10年間を経たホトでは、各アイル間の共同作業や相互補助の面で新しい変化が生じた。事例で見たホトの1つでは、これまですべてのアイルが羊と牛を飼育していたが、放牧が禁止されたほとんどのアイルが羊と牛を売却して、移民村で酪農へ転換した。5年間の期限付きだった「三牧政策」がさらに5年間延長されて2013年に終焉を迎えた時、ホトに戻った各アイルは、ホルシュタインを飼育する酪農飼育と主に羊の飼育という二手に分かれた。こうした飼育面の変化が、アイル間の補助作業に影響を与えている。ホルシュタインを飼育しているアイルは単独で農作業をこなし、作業時間が小刻みになったことで、他のアイルを補助できなくなった。他方で、羊を飼育しているアイルは、羊の毛刈と秋の干草の運搬といった作業には補助が必要である。だが羊を飼育しているアイルにしか頼めない。なぜなら、ホルシュタイン飼育と羊飼育の作業時間帯が異なるからである。したがって、飼育している家畜の種類によりアイル間の相互補助に変化が生じているといえる。ただし、血縁関係にあるアイル間においては、飼育している家畜の種類が異なっても日常の相互補助関係が継続している。またこれまで、金銭の貸し借りも小規模で行われていたが、銀行から借金しやすくなったので、アイル間での貸し借りが減った。さらに、他から土地を借りる

ことで人間関係がホト外に広がり、共同作業と相互扶助の輪もそれによって広がりを見せている。そのほかにもホトの内部では様々な変化が現れた。機械化による変化は、秋の一大作業である草刈りが相互補助によるものだったのが、機械で個別に解決できるようになった。だが、牧草を運搬する作業においては、まだアイル間の共同作業が残っている。各ホトに1つしかなかった井戸は、生活水準の上昇と家畜頭数の増加による水不足によって、アイルごとに1つずつ所有するようになった。これまで日干しレンガで造っていた畜舎は、毎年塗り替え作業が必要で、親族およびアイル間の相互補助が必要だったが、生活水準の上昇および補助金の支援により焼レンガの畜舎へと変身し、塗り替え作業が不要になった。こうして相互補助が減少する傾向となっている。

(3)ホトにおいては、国家政策による牧草地の分割に加えて、子ども世代の結婚独立によってアイルが細分化され、牧草地が細分化されたことが、牧草地不足をもたらしている。それによって、ホトから離脱し、他のホトで土地を借りることによって放牧生活を送らざるをえない。定住放牧という形態をとりながらも、定住が安定していない。アイル間の土地面積の格差も見られる。直系家族で親と兄弟姉妹の土地を継承した後継ぎは、牧草地不足に陥らず安定した経営が見られる。また、後継ぎではないが家畜配分の時にすでに1世帯として独立していた家族は、人数分の土地に世帯分の土地が配分されたことによって、それに加えて他から土地を借りて補うことで牧草地不足問題を解決している。もっと厳しい状況に置かれているのは、家畜配分の時にまだ独立していなかった男子である。結婚して独立する時に1人分の土地しかないため、ホトから離脱し他の地域で土地を借りなければならない状況になっている。

(4)牧草地を共同利用することで持続的な牧畜業が可能だったものが、個別化が進行することで牧草地の不足をもたらし、さまざまな方策をとらなければならなくなった。こうしたことが、生活面における変容にも影響を与えている。人間関係における変化では、牧草地をめぐるトラブルが突出している。牧草地の配分と管理をめぐり、同じホトに生活しているアイル間において争いが増え、人間関係が悪化している。また、牧草地を借りることによって、作業が小刻みになり、忙しくなる。その結果、家事や娯楽の時間が減った。さらに他の地域から借りている場合、家族と別居せざるをえない。このことが家族関係の悪化につながると懸念される。子どもの教育への悪影響も生じている。定住できない親と一緒に転々とする生活だからである。こうした子ども世代、孫世代の問題は、より大きな懸念、すなわち牧畜業の後継者問題をはらんでい

る。本研究の対象地のホトの多くは後継ぎが世代交代したばかりで、その子ども世代が10代前後であるから、問題はまだ顕在化していない。それでも、ある事例においてはホト全体において若い世代が後を継がない状況が生じつつある。これがこのホトの特殊な問題なのか、あるいはより一般的な問題かは明らかではないが、ホトの中のアイルに後継ぎがないとなるとホトの存在自体が不確かになるわけで、これは今後の大きな課題になると思われる。

(5) 牧草地不足や共同作業の減少といった個別化の進行が、牧畜や酪農などの生産面だけではなく、相互扶助や家族関係、教育にまで及ぶさまざまな問題を引き起こしており、対象地の牧畜民にとっては危機的な状況が迫っていると言えるだろう。しかし、牧畜民はただちに牧畜や酪農を離脱して都市での就業へ移ろうとしているのではない。むしろ牧畜に基づいた生活や社会関係を維持していかこうとする志向が見られる。とすれば、今後は、牧畜業を持続的に営むのであれば、かなり難しいけれども個別化を前提にした上で、牧草地の共同利用を模索する方向を目指すしかないと考えられる。そうでなければ、酪農に転換するか、まったく別の職業に変わるしかないだろう。いずれにしても、現在の牧畜民にとって厳しい選択を迫られることになると思われる。また、生活内実や地域社会においても個別化は避けられないため、そのことによって生じる問題への対応が必要となるだろう。牧草地の個別化や牧畜業に関わる共同作業の減少は、アイル間の人間関係を疎遠にし、定住生活の困難や市場経済の浸透は、生活全般での不安定化をもたらしている。牧畜民の今後はますます厳しい状況にならざるをえないように思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

何淑珍、根釦パイロットファームにおける生活文化の形成 - 開拓初代女性の文化活動を事例として -、社会学年報、第43号、2014、pp.95-106

〔学会発表〕(計4件)

何淑珍、地域文化の創出と継承、2016.10.9、日本社会学会、九州大学(福岡県福岡市)

何淑珍、中国内モンゴルにおける現代化と牧畜民の生活変化、2015.11.5、日本村落研究学会、和良町民センター(岐阜県和良町)

何淑珍、定住と移住における牧畜地域社会の変容、2014.11.23、日本社会学会、神戸大学(兵庫県神戸市)

He, Shuzhen, From Community to Network: A Case Study in Rural Inner Mongolia in Modernization, International Sociological Association, 2014.7.17, 横浜パシフィコ(神奈川県横浜市)

〔図書〕(計1件)

何淑珍 他、中国農村の集住化、御茶の水書房、2016、320

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

何 淑珍 (HE, Shuzhen)

宮城教育大学・教員キャリア研究機構・協力研究員

研究者番号：60624848